

## ガラス溶融炉A系列の試験で行き詰り

### A炉の試験を事実上放棄し、B炉で試験を再開しようとしている

保安院は原燃の方針を承認するな

#### KMOC試験との比較という装いをとってB系列での試験再開を目論む

日本原燃は、7月15日、ガラス溶融炉A系列でのガラス固化試験が行き詰まる中、もう一方のB系列で試験を再開するという計画を示した報告書(以下「7月15日付報告書」)を提出した。

ガラス固化試験はA系列から開始し、A系列での安定運転が確認された後、B系列の試験を開始する計画となっていた。しかし、A系列の試験は、一昨年10月の流下トラブルの後、長期中断したままである。今後も炉内残留物除去作業等を行う必要があり、再開の目途は立っていない。炉内残留物は数十キロと確認されており、これを除去するだけで約1ヶ月かかるとされている。A系列で安定運転できていないことは、原燃も7月15日付報告書で認めている。

このような中、原燃は、同報告書にて、この間東海村で行ってきたKMOC(実物大模型炉)での試験との比較という装いをとって、B系列で試験を再開する方針を出した。同報告書では「KMOCと実機の比較評価等をより確実にを行うために、まず実廃液による試験を実施していないB系列で実施する」とし、さらに、「KMOC試験結果の実機への反映の最終的な確認を行う目的で同系列において継続して実廃液による運転確認(試験)を行う」としている。A系列の安定運転がB系列で開始する条件であったのに、KMOCを持ち出して、現行計画を変更する理由付けをしたのである。KMOCでは模擬廃液しか用いていないのに、その結果を教訓にするのは理由にならない。一方、本来のA系列の試験計画には全くふれていない。事実上、A系列の試験を放棄し、A炉が使いものにならないことを認めているのではないか。

#### 国の委員会の決定に反している

この試験計画は、これまで原燃が出してきた計画にも、それに対して国の委員会が下してきた決定にも明確に反している。2008年6月30日の原子力安全・保安院の核燃料サイクル安全小委員会では、A系列で運転性能確認試験を実施し、「技術的見地から十分な確認が得られた段階で、その結果について事業者より報告を受け」、それに対する保安院の確認が得られた後、「A系統について使用前検査を開始するとともに、B系統について」運転性能確認試験を実施する、という保安院の評価書(以下「6月30日付評価書」)が承認されている。

原燃はその後、同年10月に再開した試験の結果に対して、6月30日付評価書で求められているA系列の運転性能が確認されたという結論を下した報告書を同年10月下旬に提出した。しかし、その内容は、不溶解残渣廃液供給後の酷い結果を棚に上げて、同廃液供給前の試験結果のみをもって対策は妥当とする異常なものであったため、報告書の結論は事実上否定された形になった。それ故原燃は次に進むことができなかったのである。

しかし、未だに試験が再開できないという行き詰まった状態にあるが故に、原燃は、別の理由付けをすることで、国の評価書を無視して勝手にB系列での試験に進もうとしているのである。

今回、原燃が出した試験計画は、核燃料サイクル安全小委員会再処理WG(非公開)の承認をもって実施されると報道されている。保安院と小委員会は、自らが決定した6月30日付評価書に書かれている国の方針を守り、原燃の7月15日付報告書について、B系列での試験を行う条件はないことを明確に示すべきであり、同報告書を突き返すべきである。